

恥ずかしい遠足

志茂田景樹

(作家・タレント)

父と母は対照的な性格でした。父は見栄っ張り、張りで気が早く、何かにさつと取り組んでも、要のボルトを一つ締め忘れるようなところがありました。母は何ごとにもじつくり構えて段取りを立ててから取りかかる性格でした。

僕は一兄二姉のきょうだいがいでの末っ子でした。兄は終戦の年の夏に戦死しており、男の子は僕一人になったこともあったのでしよう。更に僕は病弱でも貧弱な子どもでしたので父母から競うように溺愛されました。

小学二年のときの遠足の目的地は学校から約五キロの距離にある井の頭公園でした。子どもにとっては文字通り遠足でした。

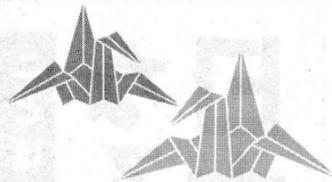
行きも帰りも途中で一回休みました。帰途の休みの前、僕はリュックを付き添って来た父に持つてもらいましたが、もうへとへとでした。休みになって力が抜けました。

それでも「出発」と引率の先生の声がかかると、僕は誰よりも早く立ち上がりました。その僕の前に父が飛んできて背中を向けてしゃがみ、

「タダオ（僕の本名）、おぶされ」

と、うながしたのです。

僕は恥ずかしさで逃げ出したくなりました。



だいたい、父兄の付き添いなんて他に一人二人いた程度で、僕の本性は気が強く負けず嫌いでした。クラスのみんなに対して顔向けできないぞ、という気持ちでした。みんな父と僕を見ていました。

僕はうつむいて父におぶさると目を閉じました。一秒でも早く学校に着いてほしいと祈りました。

学校のそばまでくると、たあちやん、と僕を呼ぶ母の声がしました。目を開けると、母が僕の履き潰し寸前で靴底が紙のように薄くなった運動靴を手にして笑っていました。

父の背中から下りると、僕は急いでその運動靴に履き替えました。

「まだ履きなれていなかったから靴擦れしたでしょ。お父さんが履かせたものだから」

それまで履いていた新調の運動靴を振って母が父の顔を見た瞬間、父は叫びました。

「あつ、さつき休んだところにリュックを忘れたー!」

そのときには父は僕らに背中を見せて駆けていました。

クラスメートの多くが笑い、父の付き添いに加えて母までが付き添いに現れたことに、僕はまた屈辱感に似た深い羞恥心に襲われたのでした。

今でも思い出すと赤面します。